教育実習を充実させるための取り組み報告
－教育実習指導Ｂの改善－

下前　弘司・鵜木　毅・遠藤　啓太・大江　和彦
蓮尾　陽平・見島　泰司・森　才三・山名　敏弘

広島大学附属福山中・高等学校において実施されている教育実習をより充実させるために，社会科として，大学と連携をとりながら様々な取り組みをおこなってきた。本稿では，教育実習指導Ⅰ・Ⅱ（現場における教壇実習）の準備として行われる教育実習指導Ｂについて，広島大学において教育実習に関して何が求められているか，そして教育実習生がどのような現状にあるかをふまえ，社会科がどのような取り組みを行っているかを報告する。

１．はじめに

広島大学では，通常３年次において教育実習指導Ⅰ，４年次において教育実習指導Ⅱといういわゆる現場における教壇実習がおこなわれている（以下，教育実習指導ⅠおよびⅡを，「本実習」と呼ぶ)。また，これら教壇実習の前段階として教育実習指導Ｂが設定されている。

教育現場で実習生を指導する我々がいつも感じるのは，実習生が指導案作りの段階で大きなつまづきを起こし，大学で学んできたことを十分に生かし切れない現状があるということである。そこで，このようなつまづきを解消するために教育実習指導Ｂが位置づけられているとし，ここにおいて我々に何ができるかを考えてきた。

本稿では，広島大学が提示する教育実習の意義・目的をふまえ，実習生を請け負う我々が教育実習指導Ｂにおいてどのような取り組みを行っているかを報告する。

２．教育実習指導Ｂについて

教育実習指導Ｂは毎年６月におこなわれ，９・１０月に実施される中・高等学校教育実習指導Ⅰ・Ⅱに備えるためのものとして位置づけられている。実習生は，教育実践の現場に赴いて主として観察実習を行い，次のような内容の実習を行うことになっている。

１．中学校・高等学校教育の全体について説明を聞き，理解を深める。
２．中学校・高等学校教育の実際を観察し，授業についての理解を深めるとともに，授業実践の基礎的・基本的な能力を養う。
３．幅広く教育現場での活動を観察し，教育者になるための自覚を高める。[1)]

教育実習指導Ｂは，連続した３日間で行われる。上記のような内容をここに記されていることは，あくまでも概略であって，具体的かつ詳細な部分については附属学校に任されている。各附属学校は，広島大学が求めている教育実習のあり方に従って，様々な取り組みを行っている。

３．広島大学における教育実習で求められていること

広島大学および附属学校が共同で作成し，教育実習生必携の手引き書として用いられている，『中・高等学校教育実習の手引き』から，教育実習において求められていることを整理する。

３．１．教育実習の意義について

一般に教育実習の意義は，「理論と実践の統合」，「教職技術の習得」，「教育者精神の涵養」にあると考えられている。教育実習は，教職専門教育の一部分でありながら，同時に教師教育の中核として位置づけられる。その意味について以下で考えていく。

第１に，教育作用は，理論と実践の不可分の結びつきの上に成立しているということである。大学の授業の中心は，教育の基礎理論の学習に向けられており，教育現場での教育実習は，教育実践の基礎学習である。教育実践を導き，学問的な基礎を提供するのは教育の「理論」であり，この「理論」は教育「実践」によって検証され，補正される。教育実習は，大学の教室で学習した教育理論の検証の機会であり，理論の実践化の場であると同時に，実践を理論化していく契機を提供する。これは，大学の教室で学習した「理論」を，学生各人が，実地経験の学習過程で主体的に再構成し，実践を踏まえてさらに高い次元の理論を主体的に構成する過程ととらえることができる。この点で教育実習は，教師教育の中で，「理論」と「実践」を有機的に結びつける機会であり，この両面の認識と学習を進化拡充する上で独自の意義を持つ

ものと言える。[2)]

ここでは，教育実習と大学における学びとの関係が述べられている。大学で修得した理論を実践に移す場が教育実習であるということは，実習生がどのような理論を学んでいるか，そして実践に移すとなるとどのような課題があるかということを，実習生の指導に当たる我々が意識していなければならないことを意味する。

第２に，教育実習は，教育に関する実践的見地を深め，実践上の技術を習得訓練する上で，独自の価値を持つ。理論的知識は科学の研究成果や理論体系から間接的に学習できるが，実践的知識と実践上の技術は，実践の過程の中で，直接的経験を通してのみ学習される。これは，あたかも泳法に関する知識と技術の学習が，水泳の実技指導無しには達成されないのに似ている。この意味で教育実習は，教育実践に学生が直接関与する教育課程であり，教師としての実践的能力の学習のために，他の教育課程では代置できない独自性を持つ。[3)]

ここでは，実践的知識と実践上の技術を習得できる場としての教育実習について述べられている。重要なのは，ただ教職体験をさせればよいというのではないという点である。教育実習において，授業づくりとその実践および振り返りが最も重要なことである。つまり，実践的見地および実践上の技術について，授業という観点から特に実習生に対して指導しなければならないことになる。

第３に，教育実習による教師の基礎能力の学習と習熟は，教師としての役割遂行能力の準備という点で独自の意味を持つ。教育の対象である児童・生徒は，教師の試行錯誤や実験の対象として失敗したり，やり直しをしたりすることを許さない，一回的な存在である。これは人命に関わる医療行為の対象に似ている。教師の仕事は，一定水準の専門的能力を不可欠の前提とするものである。そして，学生は，教職に就くと同時に，一人立ちして，教師としての全責任を身に負わなければならないのである。そのために教師を目指す学生は，教師としての役割遂行に書くことのできない知識と技術の基礎を体系的に学習し，習得しておく必要がある。この意味から言って，教育実習は，教師になるための教育課程の本質的要素を構成する。[4)]

児童・生徒に対して行われる教壇実習は，決して実習生の試行錯誤や実験ではないということが明記されている。本実習の中心課題が授業であるからこそ，実習生は授業づくりとその実践について多大なプレッシャーを抱えることになる。これに対して我々は，自らが担当する生徒のためにも，実習生に対して十分なサポートを行わなければならない。実習生数と担当させる授業数の関係から，本実習初日に教壇実習をさせざるを得ない現状がある中，本実習の事前指導とも位置づけられる教育実習指導Ｂにおいて，授業づくりに関する十分なサポートをおこなっておかなければならない。

３．２．教育実習の目的について

教育実習の目的については，以下の４項目が挙げられている。

①教育の現実と教師の活動について体験的・総合的認識を得させる（認識的側面からみた目的）
②教科や教職に関する知識や理論を教育の現実に主体的に適用してみる実践的能力を養う（技術的側面からみた目的）
③新しい課題の発見と課題を解決するための研究的態度と方法を身につけさせる（研究的側面からみた目的）
④教職についての使命感および自己の能力や適性についての自覚を得させる（人格的側面からみた目的）[5)]

特に教育実習生がつまづきやすいのが，②であり，我々が特にサポートできる部分である。実習生は，大学において様々な理論を学び習得しているが，それを現場の授業に適用させるとどうなるか，具体的にイメージしにくいようである。大学において実践的な演習を行っていたとしても，実際に授業を行う現場の様子や生徒の様子が分からない以上，どうしても限界がある。先にも述べたが，本実習開始と同時に教壇実習をさせざるをえない現状からすると，大学において学んだ理論をどのように実際の授業に適用できるのか，具体的に授業をどうつくっていけばよいのかについて，本実習以前に把握させる必要がある。そこで，本実習の事前指導として位置づけられる教育実習指導Ｂにおいて，実習生に対して現場をイメージしながら具体的に授業づくりができるようにするための基礎付けをしておくべきだということになる。

４．教育実習指導Ｂの取り組み

広島大学附属福山中・高等学校では，教育実習指導Ｂがおこなわれる初日に，指導案事例集を配布している。これは，具体的に附属福山でどのような授業がおこなわれているかを紹介するものであるとともに，どのように授業をつくっていかなければならないかについての手引き書でもある。この指導案事例集を用いて，我々は授業づくりに関する指導を行っている。

では次に，教育実習指導Ｂがどのようなかたちで実施

されているかについて説明する。次の表は，３日間にわたる教育実習指導Ｂが具体的にどういうプロセスで行われるかについて示したものである。

＜広島大学附属福山中・高等学校　社会科　公民の場合＞

6月11日(水)	1	2	3	4	昼	5	6	～16:00
日　程	出勤確認	全体オリ①	全体オリ②	全体オリ③		教科	教科	まとめ
内　容	諸連絡	学校紹介	心構えと諸連絡，生徒指導	ICT活用講座		全体指導	授業観察	実習録の整理
科　目							現代社会	
担　当						下前	蓮尾	
場　所	MMH	MMH	MMH	MMH		会議室	5C	MMH

6月12日(木)	1	2	3	4	昼	5	6	～16:00
日　程	出勤確認	教科	教科	教科		教科	全体オリ④	まとめ
内　容	諸連絡	指導	指導案作成	指導案作成		指導	教育課程と研究	実習録の整理
科　目		現代社会	現代社会	現代社会		現代社会		
担　当		下前	下前	下前		下前		
場　所	MMH	会議室	MMH	MMH		会議室	MMH	MMH

6月13日(金)	1	2	3	4	昼	5	6	～16:00
日　程	出勤確認	教科	教科	教科		教科	まとめ	まとめ
内　容	諸連絡	指導案作成	指導	授業観察		指導案作成	実習Bを終えて	実習録の整理
科　目		現代社会	現代社会	現代社会		現代社会		
担　当		下前	下前	蓮尾		下前		
場　所	MMH	MMH	会議室	4C		MMH	MMH	MMH

・社会科では，世界史・日本史・地理・公民というかたちで，本実習において主に担当する科目に分けて指導を行っている。
・「場所」のMMHは，マルチメディアホールのことで，実習生全体に対する講話や諸連絡をおこない，実習生の待機場所としても用いられる場所である。

社会科としては，「日程」欄に「教科」と書かれている時間を担当する。注目いただきたいのが，「内容」欄である。これは基本的に以下のように構成されている。

①全体指導
②授業観察
③指導案作成指導
④指導案作成
⑤指導案作成指導２
⑥授業観察
⑦指導案作成指導３（ふりかえりを含む）

まず，教育実習指導Ｂにおいて学んでもらいたいこと，すなわち，大学において学んだ理論をどのように実際の授業に適用できるのか，具体的に授業をどうつくっていけばよいのかについて，本実習以前にしっかり把握しておかなければならないこと，そして指導案事例集を用いて，どのような授業をつくる必要があるかについて，全体指導において理解させる。その上でまず授業観察をおこない，現場における授業を具体的にイメージさせる。そして，実際に指導案を作成させる。科目ごとにグループを作り，基本的にそのグループは同一テーマ・内容で指導案作成をおこなう。「指導案作成」の時間には，適宜我々が実習生の質問にこたえつつ，つまづきを解消させながら指導を行う。⑤の指導案作成指導２では，実習生が作成した指導案をそれぞれ比較検討し，扱う内容・授業の目標・問いの構成などによって授業がどのように変化するかについて理解させる。この指導によって，何を教えたいか・教えるべきかを考えながら目標をたて，内容を精査し問いを構成していくという一貫性を持った授業づくりへの意識付けができる。この意識付けのもとで，実習生に与えたテーマと同じ内容の授業を観察させる。それをふまえて指導案を最終的に仕上げていくというプロセスをとっている。

これにより，やり直しがきかない本実習へのプレッシャーを緩和し，授業づくりのつまづきを解消していくことができると考えている。また，大学において学んだ理論をどのように実際の授業に適用できるのか，具体的に授業をどうつくっていけばよいのかについて，本実習以前に把握させ，実践的知識と実践上の技術を身につけさせる有効な手だてともなる。

５．実習生の感想

ここでは，今年度公民科で担当した実習生の感想を一部紹介する。

この３日間の教育実習指導Ｂを通して，一つの形として指導案のおおよその流れを作成することができました。今までの大学の講義などでは，授業の仕方の類型や指導案の概要など一般化されたものを多く学び，自分自身でどんな生徒にどういうことを教え，何を身につけて欲しいのか，そのためにどう教えるのかと言うことをうまくイメージできていませんでした。先生の指導では自分の頭の中で形になっていなかったことを明確にしていただき，指導案をよりよいものにすることができました。これから本実習まで，自分の学問としての知識や教材分析など，課題の克服や準備にしっかり取り組み，実習が充実したものとなるよう，努力していきたいと思います。

実習生同士でそれぞれの指導案を見比べてみることで，一つの同じテーマを用いても，人によってピックアップするもの，ベースとするもの，アプローチに大きな違いが見られることが分かり，それぞれの問題点やよい点，そしてその特色からつながる次の展開の違いなど，単純におもしろさを感じることができた。本実習に向け，まず知識として内容理解に努めなければ話にならない。まず自分に必要なことは当たり前の知識を完璧にしておくことだと思うので，しっかりと学び，準備を整えてから，本実習にまた，ここに戻ってくる。

指導案はよい発問だけでなくまず目標が大切だと言うことを学びました。今までは，よい適切な発問をつくることばかりにこだわって，目標も立てぬまま指導案を作成してしまい，結局筋道が通らない指導案になっていました。教科書の内容をベースに目標を考え，その目標に向かって筋道が通るように発問や扱う内容を考えていくと，指導案を作成しやすくなることが分かりました。さらに，筋道が通った指導案にするためには構成もしっかり吟味しなければならないと感じました。指導案指導の中で，展開のまとめがなかったり，展開の順序がおかしかったり，展開の中にたりないものがあるという指摘がありました。問いの流れがおかしいと，生徒が理解しづらくなることがよく分かりました。このような学びの上に，授業観察があり，自分が作成した指導案の単元に関する附属の先生の授業を観察しました。授業の進め方や発問の内容，発問の仕方，生徒との関わり方など，学ぶことが多々あったのに加えて，まだまだ自分にたりないものが多くあると実感しました。教育実習Ｂを終えて，本実習に向けての自分の課題が明確になり，とてもよい実習になったと感じました。

これをみると，授業づくりのつまづきを解消していくこと，また，大学において学んだ理論をどのように実際の授業に適用できるのか，具体的に授業をどうつくっていけばよいのかについて，本実習以前に把握させることができたと評価できる。

また，本実習の際に，当校で教育実習指導Ｂをおこなった実習生に対し，教育実習指導Ｂで学んだことが本実習に対してどのように生かされたかに関するアンケート調査をおこなった（１９名対象）。これによると，１７名の実習生が，指導案作成や授業づくり・実践に関する不安が小さくなった，あるいは実際の授業づくりが明確にイメージできたと回答している（残り２名は無記入）。ここからも，一定の成果が上げられていることが分かる。

６．今後の課題

今後も，実習生に具体的なイメージをもたせ，授業づくりに関するつまづきや不安を解消するこの取り組みを継続していきたい。さらに，教育実習指導Ｂの取り組みだけではなく，本実習に関することについても，大学において実習生がどのようなつまづき・課題を抱えているかを把握しながら，大学と深く連携をとりつつ，継続してより実習生にとって糧となる指導内容・指導方法を考えていきたい。

【註】

1)『中・高等学校教育実習の手引き（平成２６年度版）』p.6 より抜粋

2)『中・高等学校教育実習の手引き（平成２６年度版）』p.3 より抜粋（下線は筆者）

3)『中・高等学校教育実習の手引き（平成２６年度版）』p.3 より抜粋（下線は筆者）

4)『中・高等学校教育実習の手引き（平成２６年度版）』pp.3-4 より抜粋（下線は筆者）

5)『中・高等学校教育実習の手引き（平成２６年度版）』p.4-5 より一部抜粋